

新批評・近代日本文学の構造

1

近代文学の作者

高田瑞穂・林恵子編

国書刊行会

新批評・近代日本文学の構造 ①近代文学の作者

昭和54年11月30日 第一刷発行

平成4年1月20日 第二刷発行

著作権者との
申合せにより
検印省略

編者 高田瑞穂・林 恵子

発行者 割 田 剛 雄

〒170 東京都豊島区巢鴨3-5-18

発行所 株式会社 国書刊行会

電話 (3917)8287(代表) 振替・東京5-65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。 印刷・セイユウ写真印刷㈱ 製本・青木製本

ISBN4-336-02038-8

緒言

高田 瑞穂

『新批評・近代日本文学の構造』第一巻の刊行に際し、国文学、殊に日本近代文学研究に不可欠の前提について一言する。このことは読者である方々にも是非知って頂きたいことである。そういう不可欠の前提を、ここでは三箇条にしぼって、小生の実感に即して記すこととする。

最初に言わなければならないことは、日本近代の特殊性である。このことは、明治末年において漱石が明確に教示している。西欧においては二世紀以上の時を要した近代国家形成を、日本は長く見ても四十年で一応完了した。この日本近代化のあわただしさを、近代国家に共通した資本主義体制の展開に即して考えると、西欧諸国は、それぞれの形で、重商主義時代から自由主義時代へ、自由主義時代から帝国主義時代へという展開を辿ったのであったが、日本の場合には明らかに、重商主義という富国強兵時代から、自由主義時代を飛びこえて一挙に帝国主義時代即独占資本体制の時に突入したのであった。ここに明らかな自由主義時代の欠除こそ、日本近代文化の暗さ、浅さの根本的理由であった。そのあわただしい近代化の過程においては、日本人は、自我の内面的価値即近代的自我の確立の時を持たなかったのである。そしてこのことは、今日の日本にも依然として暗影を投じ続けているのである。このことの理解が、日本近代文学の暗さの理解には不可欠の前提である。

第二に告げなくてはならないことは、文学の世界、学問としての文学をもこめてこの世界には、自然科学の世界のように絶対ということはあり得ないということの認識の必要性である。自らの個性を誇るとともに、他の個性をも認めるということ、これも不可欠の前提であろう。この点にも、日本近代の特殊性の暗影は未だに消えていないのであ

る。

最後に告げたいこと、特に研究者に告げたいことは、学問としての文学とは人間学であるということである。これも小生の実感である。文学作品を本当に読む前提として忘れてならないことは、自己凝視である。本当に作品を読むということは、突きつめれば、作家との対話に他ならない。そしてその対話を通して、人間・人生に関する何等かの開眼を果たした喜び、それこそが諸者の感銘である。そういう感銘を重ねることは、自然に、読者・研究者自身の人間性の深まり、人格の高まりとなるであろう。私の実感に即したそういう感銘を一二記しておこう。

「日本は西洋から借金でもしなければ、到底立ち行かない国だ。それでゐて、一等国を以て任じてゐる。さうして、無理にも一等国の仲間入をしやうとする。だから、あらゆる方面に向つて、奥行を削つて、一等国丈の間口を張つちまつた。なまじい張れるから、なほ悲惨なものだ。牛と競争をする蛙と同じ事でもう君、腹が裂けるよ。」

これは漱石の『それから』の一節である。もう一つ、鷗外の『妄想』の一節を引く。

「『奈何にして人は己を知ることを得べきか。省察を以てしては決して能はざらん。されど行為を以てしては或は能くせむ。汝の義務を果さんと試みよ。やがて汝の価値を知らむ。汝の義務とは何ぞ。日の要求なり。』これは Goethe の詞である。」

『それから』の主人公代助の右の訴えと、鷗外を通して知ったゲテのいう「日の要求」、これは不斷に小生の内に生動を続け、小生の生の支えとなつたのである。

最後に、本書第一巻に寄稿された諸氏に、編集者として何一つ御役に立たなかつた小生から、謝辞を記す。有難う。

本書が、読者の皆さんにも、必ず何等かの開眼を果たすことを期待する。

I

近代文学の作者

目次

緒言

高田瑞穂

1

第一章 近代作者の成立と意義

近代作者の宿命と情熱

高田瑞穂

9

作者気質の変遷について

森安理文

31

近代作者の生理学

遠藤 祐

49

作者の文学行動と生活

大森盛和

67

第二章 作者の影像

作者の素顔と仮面

林 恵子

89

作者の組織と個

石内 徹

103

作者から見た類型と独創

佐野和子

119

作品における作者の自画像	大森澄雄	131
--------------------	------	-----

男性作者と女性作者	高田芳夫	159
-----------------	------	-----

第三章 作者の内側と外側

作者の対社会の抵抗と順応	栗坪良樹	173
--------------------	------	-----

作者と風土	吉田凜生	187
-------------	------	-----

作者の傷の正と負	久保田芳太郎	201
----------------	--------	-----

作者の優越感と劣等感	菊田義孝	215
------------------	------	-----

あとがき	林 恵子	229
------------	------	-----

第一章 近代作者の成立と意義

近代作者の宿命と情熱

高田 瑞穂

序説 宿命とは何か

「近代作者の宿命と情熱」という主題は、決して作家だけの問題ではなく、今日の、我々の生そのものとも関連するものである。まず、「宿命」という概念の規定から、この問題に触れてゆくこととする。

一般に「宿命」ということは、「前世から定まった運命」という意味に解されている。しかし、それでは同義反覆の域を出ない。このことばには、東西古今を通じて、様々な歴史的認識がまつわりついているのである。今はその全体に触れる余裕はないが、一二無視できないものを挙げておくこととする。

東洋における宿命観を代表するものの一つは、いわゆる老荘思想である。紀元前五世紀後半の人老子は、晩年『道德経五千言』を書き残したと伝えられている。現存する『老子』は三世紀前半に出たものと考えられているが、老子その人の著作ではない。しかし、そこに老子の思想の告げられていることには疑いはない。そこで老子は、宇宙の奥の本体を「無」(道・一・大とも)と名づけ、「有」の世界即ち現実世界の総ては、この「無」より生ずるという本体論を告げている。したがって人間の生の目指すべき唯一の道は、幼児の如き柔軟素朴な態度によって無為自然の状態

に復帰することであつた。同じように春秋戦国の世にあって、孔子は、仁義道德によって秩序を回復して大統一国家を形成することを理想とした。そういう儒教の道とは逆に、無への回帰による寡民小国を理想としたのが老子であつた。これが四世紀後半の人莊子に継承された。孟子よりやや後の人莊子は、その著『莊子』において、人間の知識判断を相対的、狭小と否定し、超越的無の世界に帰することを説いた。この老莊派からは、やがて晋時代の「竹林の七賢」すなわち阮籍・山濤・嵇康・向秀・劉伶・阮咸・王戎ら、脱俗・風雅、談笑・飲酒に明け暮れるデカダンが生まれたのであつた。彼らはいつとも、竹林に坐し、現実を無視し、老莊を談じ、盃を交わし続けたのであつた。無為にして自然に任せよ、人為の技巧を弄する勿れという老子の教えは、かくしておのずから、一つの宿命観につながつていたのである。

如上の老莊思想に対して、もう一つの東洋的宿命観は、仏教のそれである。日本古典文学の一底流たる「諸行無常」は、仏教の三法印すなわち三根本義の一つである。その第一が諸行無常印、第二が諸行無我印、第三が涅槃寂靜印である。第一の諸行無常印とは、一切の有為の諸法即ち物心にわたり構成される一切の現象は、進化と退化の両面を内包して必ず変化生滅するもので、常恒不変のものではないという真実をいう。第二の諸行無我印とは、万有諸法は皆因縁によって形成されるものであつて、因縁を離れたそれ自身の主体即ち我というものは無いという教である。第三の涅槃寂靜印は、輪廻即ち生死をくりかえす人生の苦界を離れて、自由にして寂靜の理想境に到るべきであるという到達点の啓示であつた。右の三法印の第一諸行無常印は、「涅槃經」(第十四)において示されている著名な「諸行無常偈」において次のように歌われている。これを日本風に歌つたのが「いろは歌」である。

諸行無常——いろはにはへどちりぬるを

是生滅法——わがよたれぞつねならむ

生滅々已——うゐのおくやまけふこえて

寂滅為楽——あさきゆめみじあひもせず

「あさきゆめみじあひもせず」とは、明らかに生の限界の認識に他ならないであろう。即ち宿命の自覚である。

如上の東洋の場合に比して、西洋の場合は錯雑を極めている。ここでは三つほどの暗示に止める。その第一を、いわゆる「決定論」、第三をニイチェの「運命論」とする。

「決定論」(Determinismus)とは、人間の意志、延いては世界の運動は、ある外的な力によって決定されているという理論である。明らかに宿命論である。そしてその外的な力の性質如何によって、大きく二分される。その一つは、外的な力を精神的なものと見る立場、他は物質的なものと見る立場である。後者は唯物論であり、おのずから自然科学に連なるが、今は前者にだけ目を向けることとする。

前者即ち精神的決定論も亦、幾つかの主張が重なっている。その第一は、世界は神の意志によってあらかじめ計画された秩序に従って運行し、中途のいかなる変更も許されないとする予定説ないし宿命論である。西欧中世神学の中核をなすものがこれで、この考え方はアウグスチヌス(紀元三五四～四三〇)からトマス・アクィナス(一二五五～一二七四)まで継承され、前後十世紀に及ぶものであった。

第二は、第一の裏がえしで、人間は神の定めた目的に向かって自ら進むべき存在であるべきであるという、目的論的決定論である。人間の意志の自発性を、神の定めた目的に向かって進むという形で認めようとしたこの立場は、西欧近世の観念哲学の底流をなした。その中核をなしたのは、言うまでもなくカント(一七二四～一八〇四)であった。

第三は、第二の裏返しで、まず人間の意志の自発性の確認から出発しつつ、その意志の自発性そのものが決定的な空転に過ぎないという認識に到達して行ったもので、その到達点は、裏返し裏返し素因となった第一の場に近い。しかし必ずしも同一ではない。そのことを明らかに告げているのが、ニイチェ(一八四四～一九〇〇)の「運命の愛」の主張であった。彼は次のような断定を、「運命の愛」と名付けたのであった。

人間が運命に対してとり得る態度は、これに忍従するか、反逆にそれを超えていこうとするかのいずれかしかない。しかし、そうではあるが、自己の運命を深く見詰め、自己の存在そのものが自己の運命そのものに他ならない

ことを悟れば、運命を外的制約としてではなく、自己そのものであるとして、愛情をもって受け入れることができるにちがいない。そういう愛を通して、運命と自己とが合一し、それによってより高い境地に入っていくことができるであろう。「運命の愛」とは、そういう運命と自己との止揚であった。このアウフヘーベンによって人間は、始めて真理に到達できるというニイチェの思考は、近代文学の宿命のあるべき姿の先取であった。近代作者の心情は、数々の宿命論ないし宿命観の中で、このニイチェの「運命の愛」に最も近く、最も通いあうものであった。

ここから、近代作者の宿命と情熱の主題に入ることとする。近代作者を日本近代作者に限定するにしても、この主題は日本近代文学史そのものとなるべきであろう。しかし、ここでは紙数の限度を考え、三点にしばって、右の主題の暗示に止めることとする。

第一章 北村透谷の『内部生命論』考

北村透谷——明治元年に生まれて二十七年に自らの生を断った透谷において、特に重視すべき第一点は、利害得失のない採長補短の態度の明確な克服であり、第二点は、内部生命による人間性再造の主張である。

透谷を中核として「文学界」が創刊されたのは、その死の前年に当たる二十六年一月のことであった。その第二号に掲げられた「人生に相渉るとは何の謂ぞ」は、透谷の人生観の集約である。この論文は、民友社系の史論家山路愛山が「頼裏を論ず」（明二六・一「国民之友」）において告げた「文学事業論」に対する反論であるが、愛山と透谷とは必ずしも心の通わない間柄ではなかった。それだからこそ透谷は、存分に自らの主張を告げたのである。その冒頭に近い一節と結末に近い一節と、結末とを引く。先に挙げた第一点の主張が明らかだからである。

愛山生は、文章即ち事業なることを認めて、「頼裏論」の冒頭に宣言せり。何か故に事業なりや。愛山生は之

を解いて曰く、第一 為す所あるが為なり。第二 世を益するが故なり。第三 人世に相渉るが故なりと。

而して彼は又た文章の事業たるを得ざる条件を挙げて曰く、第一 空を撃つ劍の如きもの。第二 空の空なるもの。第三 華辞妙文の人生に相渉らざるもの。而して彼は此冒頭を結んで曰く「文章は事業なるが故に崇むべし、吾人が頗裏を論ずる、即ち渠の事業を論ずるなり」と。

こういう愛山の主張に対して、透谷の反論は次第にその激しさを増してゆく。

愛山生が、文章即ち事業なりと宣言したるは善し、然れども文章と事業とを都会の家屋の如く、相接近したるものゝ如く言ひたるは不可なり。敢て不可といふ。何となれば、聖浄にして犯すべからざる文学の威厳は、「事業」といふ俗界の「神」に近づけられたるを以て損ずればなり、八百萬づの神々の中に、事業といふ神の位地は甚だ高からず。文学といふ女神は、或は老^{グレート・ミセス}嬢にて世を送ることあるも、卑野なる神に配することを肯んぜざるべければなり。

この心情は、結末に近づくにつれて、自省の度を加えて、次のように告げられている。

悲しき「自己」は人間の四面に鉄壁を設けて、人間をして、或る卑野なる生涯を脱すること能はざらしむ。鵬の大を以てしても蜩の小を以てしても、同じくこの限を破ること能はざるなり。而して蜩の小を以て自らその小を知らず、鵬の大を以て自らその大を知らず、同じく限に縛せらるゝを知らず欣然として自足するは、憫れむべき自足なり。この憫れむべき自足を以て現象世界に処して、快楽と幸福とに缺然たるところなしと自信するものは、浅薄なる楽道家なり。

それでは、人間は、如何にしてこの「悲しき Limit」を超越すべきか。全文の結びのことばに聞こう。これは透谷の絶叫に他ならない。

頭をもたげよ、而して視よ、而して求めよ、高遠なる虚想を以て、真に広濶なる家屋、真に快美なる境地、真に雄大なる事業を視よ、而して求めよ、爾の Looking を空際に投げよ、空際より、爾が人間に為すべき天職を捉り来れ、嗚呼文士、何すれぞ局促として人生に相渉るを之れ求めむ。

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」における透谷の主張が、情熱をこめた旧習打破、宿命超克への悲願であったことは、右の引用でほぼ明らかであろう。そういう透谷の風貌を、同じく「文学界」同人の一人島崎藤村は、自伝的作品『春』（明四一・「朝日新聞」）において、青木駿一という名で次のように表現している。この作の第四十五章の一節を引く。

夕方から、海の見える旅舎の二階へ上った。（略）酒が始まつてから酷く青木は真面目になつて、沈痛慷慨な語氣でもつて、古い習慣と形式とに束縛された多くの思想を攻撃し始めた。（略）青木に言はせると、今の祖国は唯青年の墓である。何等の新しい生命を認めることが出来ない。何等の創意もない。唯浅墓な泰平の歌を聴くのみである。破壊！ 破壊！ 破壊して見たら、あるひは新しいものが生れるかも知れない。今日の自分の苦戦は、すべてその精神から出た努力に過ぎなかつた。斯う青木は言ひ出した。

こういう透谷の悲願が、内部生命の確立と、それによる人間性の再造に向けられていたことは当然であつた。ここから『内部生命論』に目を注ぐこととするが、それが如上の心情の告白に他ならないことは、改めて言うまでもない。